

## ～人の生老病死と高所環境-「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応-～

編集・発行：高所プロジェクト文化班アルナーチャル研究グループ（今号編集：宮本 真二）  
 住所：〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所  
 研究プロジェクト・ホームページ：<http://www.chikyu.ac.jp/high-altitude>

## ■Geography■

## ヒマラヤの斜面崩壊

宮本 真二（琵琶湖博物館）

ここ数年、毎年のようにインド北東部、アルナーチャル・プラデシュ州（アッサム・ヒマラヤ）を訪問し、現地調査を行っているが、そのなかで最も目につくのが「斜面崩壊」（写真1）である。特に雨季の発生頻度は、すさまじい。

もう10年以上になるが、同じヒマラヤのネパール東部において、雨季に調査をしているときにも、この斜面崩壊は頻繁にフィールドで目にするのがあった。しかし、アッサム・ヒマラヤでの頻度は、比較にならないくらい多いと感じている。

たとえば、それまで雨季の調査を行ったことがなく、2007年の7月、はじめて雨季にアッサム・ヒマラヤで現地調査を行った。アルナーチャル・プラデシュ州の北西部のタワンを起点に、よりブータンよりに移動調査中の帰路、斜面崩壊が発生に出逢い、宿に帰ることができず、次の日以降も右往左往することになった。

（この調査には安藤（京大）、宇佐見（山口大）、水野（京大）、小坂（地球研）の各氏が参加されていた。）

このように、道路の封鎖は基幹道をそれると数日にもおよび場合があり、この斜面崩壊が生活レベルで深刻な問題になっていることは容易に想像できる。

この斜面崩壊の発生要因としては、①表層地質の風化層の発達、②過度の森林利用による表層地質の支持層の欠損、また、③雨季の集中的降雨が想定される。

しかしながら、ネパールとの比較で考えると、ヒマラヤ山脈の奥地まで、車両が通行できるくらいの幅をもった道路が整備されていることこそが斜面崩壊を多くの地点で発生させている。つまり、交通網の発達が結果として災害をもたしているのである。当該地域は

風下層の発達と、集中的な降雨が見込まれる地域であり、斜面の崩壊はどうしても完全に防ぐことは不可能だろう。現に集落の分布を確認しても、「地すべり」地形を利用して分布する集落が多く確認されるのである。したがって、防ぐという視点よりも、発生箇所をどう減少させてゆくのかという視点の転換が必要であると思う。

その答えのヒントを得るために、豊富な調査実績のあるネパールも含めて、まずは問題の整理からはじめないといけないと考えている。

（参考）

宮本真二（2008）ヒマラヤ地域、高所山岳地域の自然災害問題。ヒマラヤ学誌，9，49-53。



写真1 大規模な斜面崩壊跡。アルナーチャル・プラデシュ、Jang 近郊（2445 m）。2008年9月16日 宮本真二撮影。



写真2 斜面崩壊による道路の復旧工事風景。アルナーチャル・プラデシュ、タワン近郊（3500 m）。2008年9月20日 宮本真二撮影。

## ■Data Base■

### 連載「インド北東部における植生に刻まれた歴史」1. ジロ水田の除草作業

小坂 康之（総合地球環境学研究所）

なぜこれほど徹底して除草するのだろうか。

これは、ジロで水田稲作に従事するアパタニの人々をみて思った疑問である。いままで3月、7月、8月にジロを訪問したが、いずれの時期にも水田で除草が行われていた。ジロの水田では一般的に1年間に5-6回、女性によって除草が行われるという。日本でもかつて、水田の除草は厳しい農作業とされていた。しかし東南アジアの大陸部には、除草がほとんど行われない水田もある。

徹底して除草を行うことについて、いくつかの理由が考えられる。

1つは、雑草が作物の生育を阻害しないようにするためである。これは、農学の視点から推察される最も簡単な理由だ。Hage Yaka氏（64歳、現地カウンターパートであるHage Komo氏の母親）は、「最も厄介な水田雑草」としてキカシグサやイグサ、ウキクサの仲間を挙げ、その理由として「適切に除草しないとすぐに広がるから」と答えた。しかしジロの水田では、筆の中にカヤツリグサ科やゴマノハグサ科の小型の草本、畦の上にドクダミやコケオトギリソウなどが主に生育し、イネやシコクビエの成長と競合する大型の雑草は観察されなかった。

ここで、「雑草」に対して、私たちの常識とは違った見方をしてみたい。上記のHage Yaka氏に、ジロで観察された48種類の水田雑草の写真をみせると、44種類のアパタニ語の名前を即答した。そのうちの多くは、作物に害を与えるほど繁茂していない種である。また、水田に生育するドクダミやセリは野菜として食べるという。このことから、同氏は雑草を作物と競合する悪者としてみるだけでなく、特別な思い入れをもって観察していることが推察される。そしてその思い入れが、頻繁な除草、つまり雑草との密接な関係につながっているのではないだろうか。

徹底して除草を行うことの別の理由として、きれいに除草された水田は所有者の勤勉さを示す、ということも考えられる。村社会の中では、村人自身の言動だけでなく、家屋や田畑などの所有物が常に周囲の目にさらされ、その状態が評価の対象となる。さらに除草作業をおろそかにすることで雑草や害虫が繁殖し、近隣の水田に悪影響を及ぼせば、非難の的となるのだ。村社会の中で、「怠惰であることは恥ずかしい」「周囲

に迷惑をかけたくない」という感情を少しでも持つ人ならば、除草作業に精を出すことは自然なことかもしれない。

いずれにせよ、「なぜ徹底して除草するのか」という問いに明確な答えを見つけることは難しい。これから頻繁に現地に通い、言葉を覚え、農作業や雑草を丁寧に観察することで、この問いから浮かび上がるアパタニの人々の暮らしについて考えてみたい。



写真1. 2009年3月18日、耕起前の水田でジロのハリ村にて耕起前の水田で除草する女性。とられた草は畦の上に置かれていた。



写真2. 2007年7月30日、ジロのハリ村にて、水田の畦で除草する女性。取られた草は、カゴに入られていた。



HALI 村の高齢者にインタビュー

石本 恭子 (京都大学大学院)

(3月19日) HALI 村の高齢者から話を聞くため、ガイドの Rai さん、Hage Doilang さんと Hage Kago 氏宅を訪問した。訪問時、友人のおじいさん一人、おばあさん二人が炉裏をかこみ話をしていた。

我々の訪問について話をしているのか、話が盛り上がっている。少し中断して、名前をそれぞれ聞いた。次に、年齢を尋ねると、はっきりとした年齢を知っている人は誰もいない。「私がこれくらいの背の時、あなたはもっと小さかったでしょ。私のほうがもっと年上…」現地語である APATANI 語はまったくわからないが、何やら大議論をしているのは確かである。Rai さんは、議論が面白いようでクスクス笑っている。議論は尽きない。議論の内容からおおよその年齢を推測し記入した。ちなみに、年齢の登録制度ができたのは約 20 年前、1980 年代からである。病院、村どこで生まれても、出産後は速やかに Statistical Department の registration office に届けなくては行けない。登録することで出産証明書が得られ、School Administration に繋がる。

続いて、もっとも好きなことについて尋ねた。女性陣の答えは、水田や、畑に行くこと。男性陣の答えは、とにかく猟なり、畑仕事をするなり何かの活動に参加することで、じっと家にいることは苦痛とのこと。ライスビアーを飲むことも忘れてはいけない楽しみの一つである。

標高約 1500m にある ZIRO は、我々の滞在期間中温度は、日中は 20 度を超えているが朝は 10 度まで温度が下がり、天気が悪いと日中も温度が上がらない寒冷な気候であった。そのような厳しい環境の中で、水が入りかけている水田に素足で入り、仕事をしているおばあさん。数時間かけて自分の山の手入れに行くお爺さん。過酷な活動であるけれども、何よりも楽しさと捉えているところに彼らの元気の秘訣を少し垣間見たような気がする。



写真1 自分の好きなことについて議論中 Hari 村 Hage Kago さん宅 2009.3.20



写真2 アパタニ族の女性 顔の入れ墨と、木のできた円いおはじきのようなものをはめているのが特徴的。 Hari 村 Hage Kago さん宅 2009.3.20

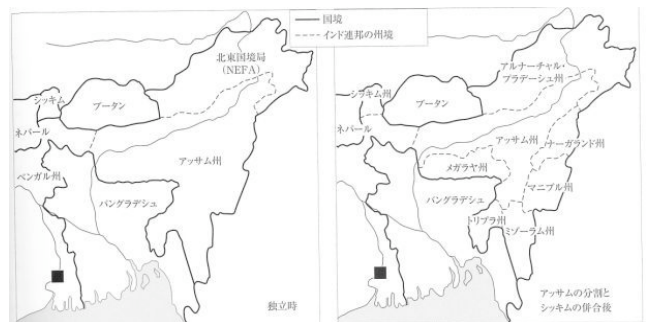


図1 北東部の細分化 (4p 安藤 opinion 参照)  
(出所：ベラン世界地理体系 12 インド・南アジア 朝倉書店, 2007 : 121 ページ)

Tripathy, B. and S. Dutta (ed.), *Religious History of Arunachal Pradesh*, New Delhi: Gyan Publishing House, 2008

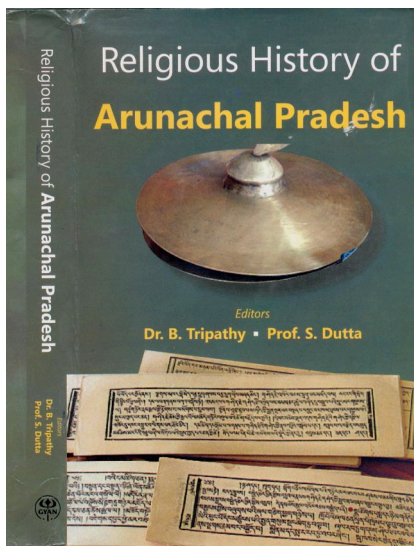
奥山 直司 (高野山大学)

本書は、2005年10月に表題と同じテーマで開催された学術大会の成果を刊行したもので、27の論文を次の三部に分けて掲載している：(i) Tribal Religion (ii) Buddhism (iii) Pan-Indian Culture. 二人の編者は共に Itanagar の Radiv Gandhi 大学に所属するアルナーチャル・プラデーシュの歴史・文化の専門家である。

アルナーチャルには25を超える major tribe と、多数の sub-tribe が居住していると言われている。本書は、これら諸民族の宗教文化に関する情報を一冊に収めた、おそらくは初めての出版物であり、全体として、アルナーチャルの多様な民族文化のパノラマ的な紹介になっている。

このうち専らモンパの宗教文化に関わるのは、第二部に収録された“Bon Cult Among the Monpas of Arunachal Pradesh”と“Mahayana Buddhism in Arunachal Pradesh—A Study of the Dirang Monpas”の2編である。その内容は今後批判的に吟味されなければならないが、これらが議論の出発点となることは確かである。

なお編者たちには、*Buddhism in Arunachal Pradesh*, New Delhi: Indus, 2008 という最新の著作があることを付記しておく。



インドのノース・イースト地域とアジア

安藤 和雄 (京都大学東南アジア研)

ノース・イーストはインドでは特別な響きをもった地域アイデンティティです。インドのアッサム州、メガラヤ州、アルナーチャル・プラデーシュ州、ナガランド州、モニプール州、トリプラ州、ミゾラム州の地域をインドではノース・イーストといいます(7つの州にシッキムを含める場合もある。3p 図1)。セブン・スターという呼び方もされます。インド独立以前は、アッサム州とNEFA(北東国境局：現在のアルナーチャル・プラデーシュ州)に分かれていた地域です。インド独立以前、アッサムとNEFAは英領インドにおいて神秘とフロンティアの象徴でした。ノース・イーストは、その魅力を十分に継承して現在にいたっています。インド人口の大多数は、インド＝ヨーロッパ語族のインド＝アリア語派に属しています。しかし、ノース・イーストではアッサム州ではインド＝アリア語派のアッサム語が話されますが、他の州では、シナ＝チベット語族の諸言語、チベット＝ビルマ語派の諸言語を話す人口が圧倒的に多いのです。このような地域を他に求めるならば、ネパール、ミャンマーそしてラオス、タイ、中国の雲南から四川省、青海省の一部の山地部に広がる諸地域となります。この諸地域は、少なくとも、チベット＝ビルマ語派と山地という共通項で括れる広大な地域は、東南アジア、南アジア、東アジアと匹敵する多様性と統一性を示しているのです。インドではノース・イーストは、辺境に位置づけられますが、実は、ミャンマー、ネパールとともにアジアの大陸部山地とチベット＝ビルマ語派で括れる地域の南部地域を構成していると見なすことができるでしょう。残念なことにミャンマー以外、チベット＝ビルマ語派の人々が多数派となった国家は現在の地球上には存在していません。国家という閉じられた単位の中で多数派の都合のよいように、チベット＝ビルマ語派の諸言語を話す人々は「辺境の人々」と位置づけられています。その結果、この広がりをもつ一つの統一した世界と見ようとする研究も行われてこなかったのが現状です。アジアの高地文明研究が学術的にユニークであるのは、まさに、この点にもあるのです。インドのノース・イーストでは、自らのアイデンティティをインド的なものと対峙させようとしています。インド＝アリア語派であるアッサム語を話すアッサム人である、ゴウハティ大学の私のカウンターパートのバガバティ教授でさえ、自らの文化的アイデンティティは、東南アジア(ミャンマー)などと類似する内容を基層とし、重層的かつ複合的にインド的であり、インドの他の地域とは大きく異なっていると理解しています。ノース・イーストを研究するということは、この地域に暮らす人々とともに、アジアの規模でノース・イーストをアジアの大地域の一つとして位置づけていくことだと私は考えています。